

2023 年度松山大学人文学部英語英米文学科 入学試験【指定校推薦型選抜】(60 分)

以下の文章は、『ディズニーランドという聖地』（能登路雅子著、岩波新書）の抜粋（一部改変）です。1901 年 12 月 5 日、アメリカ・イリノイ州シカゴの貧しい大工の四男として生まれたウォルト・ディズニーは、4 歳になる 1906 年の夏、一家とともに、ミズーリ州マーセリーンの農場に移り住みます。以下、抜粋を読んだ上で、あとの問いに答えなさい。

(中略) ミズーリは、太平洋と大西洋という両大洋から最も遠い、北米大陸の最奥部にあたる。こうした地理的環境が、そこに住む人間の精神にどのような影響をおよぼすか、少し考えてみたい。

別名「アメリカの心臓部（ハートランド）」といわれるミズーリ、カンザス、アイオワ、ネブラスカなどの中西部地域は、夏は暑く、冬は寒い内陸性気候で、気候環境自体は日本であれば、北海道の内陸の旭川あたりと似ている。一年のうち、冬が半年近くつづき、気温は日中でも氷点下、時には零下 20 度に達する。こうした中西部で暮らす人々が、自然というものに対して抱く一般的態度が、調和や共存共栄といったのどかなものでないだろうということは、日本の東北地方より南の温和な気候のなかに住む人間でも、ある程度は察しがつく。が、驚かされるのは、自然に対する彼らの敵意と憎悪の激しさである。

ウォルト・ディズニーの少年時代のわずか半世紀ほど前まで、中西部はアメリカの辺境であった。成功の夢を求めてここに移住してきた開拓者たちは、その想像を絶する苦難の記録を日記や手紙のかたちで残している。納屋から母屋に戻る途中、吹雪で方向感覚を失って凍死することや、地平線の果てから連日のように襲ってくる砂嵐に精神に異常をきたす者が出るといった悲劇は、当時、珍しくなかった。自然の猛威に生命と正気をつねに脅かされていた彼らは、窓のない家を建て、内部の壁に窓の絵を描き、外の恐ろしい景色とは正反対の美しく豊かな田園風景を描きこんだという。

19 世紀末にカンザス州トピーカで生まれ、1990 年に亡くなったアメリカの著名な精神分析医カール・メニンガーは、アメリカ人の精神構造に少なからぬ影響をおよぼしている中西部のメンタリティを次のように観察している。中西部人、特に農村育ちの人間にとり、大地の本質は泥と埃であり、泥と埃はそのまま彼らの敵、禁忌の対象であった。文明とは泥と埃を征服し、封じ込めることを意味し、その過程で、大地に対して人間が本来もっていた愛情は消失する。こうして、中西部農民は、自然に対し、強烈な敵意や破壊の衝動を抱き、自然の美しさに対しては無感覚になる。

泥が農民の敵であったということは、アメリカの道路の歴史からも十分うかがえる。メニンガーが生まれたころのアメリカでは、鉄道の発達で文明の広がりを象徴していたが、鉄道駅から遙か遠い土地に住む農民にとって、悪路は文明と彼らのあいだに立ちはだかる障害物であった。雨や雪のために通行不能になる道路のせいで、農民は郵便配達も受けることができず、農家から町に運ばれるミルクは、でこぼこ道に揺られる途中でバターになってしま

うという状態であった。「農民を泥んこ道から救え」というスローガンのもとに、地方道路の整備が進み、農村部に郵便宅配サービスが普及したのは、ようやく 20 世紀に入ったころのことである。

(1) 自然に対して幾世代にもわたって培われた独特の姿勢や感じ方は、たとえ自然自体や人間生活が変わってもかなりの慣性をたもちつづけるものである。上に述べた自然観は住宅や交通その他の生活事情が大幅に改善された現代においても、中西部に住む人々にさまざまな形で残されている。ここで重要なのは、ウォルト・ディズニーが少年時代を過ごしたころの中西部の大平原では、人々が現実には砂嵐や泥と格闘していたということである。(中略)

広大なアメリカ大陸の真ん中の、まさに恐怖空間ともいえる生活環境に暮らす人間たちが、自然の脅威の存在しない安全で清潔で快適な世界に強烈な憧れを抱いたであろうことは、想像に難くない。そのような人間のひとりであったウォルト・ディズニーに初めて成功をもたらした漫画の主人公が清潔で楽天的なネズミであったことは、これまでもたびたび指摘されてきたように、きわめて象徴的である。

周知のように、ミッキーマウスはネズミらしからぬネズミである。彼は汚らしい現実のネズミ族とはちがって、赤い半ズボンに黄色い靴をはき、四本指の手には真っ白の手袋をはめている。ミッキーマウス映画、それも特に初期のものは、農場や田園を舞台にしたものが多いが、それらは例外なく緑豊かで平和な牧歌的風景である。登場する動物キャラクターたちも、美しい彩色とともにピカピカに磨きあげられ、いつも愉快的な珍騒動を繰りひろげる。人間の言葉を話す彼らは、ほとんど動物性をとどめていない。雄と雌のちがいも、ズボンとスカート、長いつけまつげやリボンといった記号に集約され、これらの衣装を剥ぎとれば、それらはいずれも無性である。ディズニーの作品世界の大きな特色は、自然の徹底的な否定と狂信的とさえいえる衛生思想なのである。

「ディズニーの国」が「塵ひとつない清潔そのものの世界」として人々の称賛を浴びてきたことは、こうした精神のもたらした結果のひとつといえる。そこには、泥や埃と戦いつづけた中西部農民の執念が反映されている。ディズニーランドの入口から向かって左手にある「フロンティアランド」は、ミシシッピ河流域地方の開拓時代をテーマとしているが、その地面は砂塵の舞う赤茶けた土ではなく、赤茶色に着色したアスファルトであり、砂も埃も入りこむすきがない。園内の川も海も湖もコンクリートで塗り固めたもので、水が泥で汚れることはない。

こうした例に限らず、ディズニーランドは地面も山も川も含め、全体がコンクリートやアスファルトで覆われた反自然的世界に仕上がっている。ここが昔、160 エーカーのオレンジ畑であり、造成工事の第一歩が何万本ものオレンジの木をすべて根こそぎ取り除く作業であったことの意味は、きわめて重要である。自然の地形や植物を十二分にとりいれた日本の伝統的な造園とは根本的に異質な精神が、そこでは底流をなしているのである。(中略)

樹木や草花はディズニーランドの美しさを演出する重要な要素であるが、これとても自然のままの勝手な成長は許されない。それは置かれた場所のテーマや目的が何であるかに

よって、形や大きさを整えられ、ディズニー・ショーの小道具として大事な役割を負わされている。このことは、自然の木でも人工の木でも変わりはない。(中略)「アドベンチャーランド」に直径 20 メートルの枝を伸ばすこの南洋の大木はコンクリート製で、30 万枚のビニール製の葉と数千個にのぼる人工の花で飾られている。「ファンタジーランド」の一角にあるミニチュアのおとぎ話の世界「ストーリーブック・ランド」に植えられている木はすべて生木であるが、日本の盆栽の技術を応用しているほかにも、縮尺を維持するために成長を化学的に抑えられている。人気アトラクション「イツ・ア・スモール・ワールド」の前庭に並ぶツゲの木は、キリンや象といった動物の形に完璧に刈り込まれている。

すべての要素がつねにベスト・コンディションに保たれているディズニーランドにおいて、枯葉やしおれた花はタブーである。樹木はほとんどすべて落葉しない常緑樹であり、花は毎日のように満開状態のものに植えかえられる。「ディズニーの国」の植物の運命は、ミッキーマウスの笑顔に形づくられた正面ゲートの巨大な花壇に集約されている。

動物のあり方は、植物のそれよりさらに自然から遠い。「ディズニーの国」においてはネズミも象もライオンも恐竜もすべて安全で愉快的な人間の味方である。「アドベンチャーランド」のなかでも最も冒険的な「ジャングル・クルーズ」で人々が遭遇する猛獣たちも人畜無害な機械人形であるし、密林のなかには蠅も蚊もない。そして、ジャングルの裏手のトイレも、水洗で清潔そのものだ。危険な動物もばい菌も悪臭も、ここでは文明人の快適と娯楽のため、徹底的に飼いならされ、無菌化、無臭化されている。

このような世界は、ウォルト・ディズニーが 30 年にわたってアニメーション映画で追求してきたものの延長線上にあるが、その淵源をさらにたどれば、大平原を切りひらいたアメリカの開拓者たちの生活意識に行きつく。自然を恐れ、敵視した彼らの世界観からすれば、自然状態が存在しないディズニーランドは、まさに天国と映るにちがいない。ディズニーという人物の不気味さは、そうした現実には到底ありえない場所を、巨大資本を投じて出現させ、それを「地上で一番幸せな国」と信じて疑わなかったことにある。しかしながら、(2) そうしたディズニーランドの非日常世界は、しだいに虚構世界ではなくなっている。我々の住む現実の空間のほうが、いまや確実にディズニーランドに近づいてきているのである。

- 問1 中西部人は、下線部（1）にあるように、「自然に対して幾世代にもわたって培われた独特の姿勢や感じ方」を持っている。この「独特の姿勢や感じ方」とはどのようなものか。中西部の自然環境を説明した上で、それと結びつけて 100～150 字で説明せよ。
- 問2 中西部に育ったウォルト・ディズニーは、自らの自然観に基づいて、自分のテーマパークをどのようなものにするのか。本文の具体例を挙げながら 150～200 字で説明せよ。
- 問3 下線部（2）に関して、なぜそのように言えるのか、自分で考えた具体例を使って 50～100 字で説明せよ。
- 問4 ディズニーランドと日本庭園の違いについて、作り手の自然に対する考え方や態度の違いに考慮しながら、本文の内容をヒントに 100～150 字で述べよ。
- 問5 異文化に触れるとき、我々が気をつけるべき点は何か。この随筆から学び取れることを 50～100 字で書け。